

『ミライの授業』

瀧本哲史

講談社／2016年6月／1500円（税別）

エンジェル投資家で京都大学客員准教授、非常に知的でそれでいて温かい人柄だったという著者は、2019年に急逝した。大学での講義は常に盛況だったという。

本書では中学生に向けて、学ぶ意義や科学的・論理的思考が大切だと説いている。その際、日本史や世界史の教科書に載るような、近現代に生きた（生きている）人物を取り上げ、教訓を引き出している。女性を多く取り上げているのも特徴と言える。著者の主張に合わせて人物を取り上げているので、確かに時代像を提供するものではないが、しかし生徒に歴史を学びたいと思わせるという点では、歴史の授業の一例ともいえる。

コロナ禍の今、著者が存命であれば、どんな発言をしたらだろう。そう思って、少し前の時期の本だが紹介した。

『乱と変の日本史』

本郷和人

祥伝社新書／2019年3月／840円（税別）

本号巻頭のミーティング記録にもふれられている、著者渾身の力作。「結局、この国では〇〇〇〇に乗った奴が勝つ！」と帯にあるが、日本の中世を中心に「武士の時代」を概観する。その方法は、乱と変の背景・構図・結果を分かりやすく説明することで、見事に日本中世史の流れを描ききっている。

「はじめに」の一節から。あるフランスの哲学者は「人間の歴史を学びたいのであれば、日本の歴史を学べ」と言ったそうだ。

『異端のすすめ』

橋下徹

SB新書／2020年2月／830円（税別）

元大阪府知事・市長である著者の政治思想・手法は措き、その発信力・行動力の源には何があるのか。本著は、若者を対象とした講演会の内容を基に構成されたものであるが、「自分で限界を作るな！やってみなきゃわからない」がその講演会のテーマ。自身が納得できる人生を生きるためには、何事もまずは失敗を恐れぬ挑戦と行動、そして一生懸命が大切で、著者はそれを実践してきたという。

単純ではあるが、元気をもらえた。

『哲学とは何か』

竹田青嗣

NHK出版／2020年4月／1600円（税別）

フッサールの現象学を基に、ヘーゲルなどの近代哲学の復権と、ポストモダン思想への批判が述べられている。ヘーゲルもフッサールも、その思想を高校生に説明するにはとても骨が折れるが、著者は哲学者に関する入門書を数々著しているだけに、哲学書にしては叙述が明快だ。人の認識は自分の欲望に関わっており、欲望同士をおつけ合うことなく対話を開くにはどうしたらいいのか本書でわかる。

『鉄筆とピラ 「立高紛争」の記録 1969-1970』

都立立川高校「紛争」の記録を残す会編

同時代社／2020年3月／1900円（税別）

これはすごい。どこが、どうすごいのか。

50年前のピラ等が243種類残っているのがすごい。その大半を、当時一日ごとに整理した高校生がいて、それが残っているのがすごい。それらを「解説」して、一方の立場からの武勇伝でなく「ありのままに」記した第1部がすごい。50年後のこんにち振り返った手記を集めた第2部がすごい。一気に読んだ。

手記の執筆者の中には、本をつくと聞いて「もう忘れました。」と答えた人たちがいたそうだ。それがどうだ。おそらく当時のピラ等を見て、思いが堰を切って溢れたのではないか。第2部には、そんな迫力や冷静で鋭い分析が詰まっている。この本の詳細については、前号の90号に記載がある。

『人生は苦である、でも死んではいけない』

岸見一郎

講談社現代新書／2020年2月／860円（税別）

題名（の後半）に引き寄せられて手に取った。生身の人間である以上、病氣も老いも避けることは決してできず、「人生は苦もあれば楽もあるというよりは、苦なの」であると哲学者である著者は記す。その上で、その苦しみや困難は、鳥が空を飛ぶために不可欠な空気抵抗のようなものだという。そこから人は学び、成長するからである。有用性（経済性）や世間の目、他者との比較などにがんじがらめに囚われるのではなく、ありのままの自分自身を受け入れる。そして「今ここ」を生きる、それ自体に大きな価値があるのであり、生きることは手段ではなく目的そのものであるとする。だから「死んではいけない」と。ゆっくりじっくり読みたい1冊である。